

氏名	大場衣織		
学位の種類	博士(文学)		
学位記番号	博甲第183号		
学位授与の日付	2014年3月31日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
学位論文の題目	Factors Affecting the Effect of Error Corrections		
論文審査委員	主査	神奈川大学 教授	石黒敏明
	副査	神奈川大学 教授	高橋一幸
	副査	神奈川大学 教授	デビッド・アリン
	副査	神奈川大学 准教授	久保野雅史
	副査	東京大学 名誉教授	ジョン・ボチャラリ

【論文内容の要旨】

第一章 序論：第二言語習得の一分野を占める誤答訂正の研究を振り返ると、海外の第二言語学習者を対象とした研究や外国語学習者を対象とした論文は多いが、日本人英語学習者を対象とした誤答訂正の研究は比較的少ない。本研究では、未だ解明されていない日本人英語学習者（高校生）に対する英語母語話者教員の訂正の頻度、そのタイプや効果について調査した。

第二章 先行文献研究：第1に誤答訂正の研究が始まった背景とその後の研究の発展を述べている。学習者の誤答に対して行う教師の訂正の研究は、母語習得研究における子が犯す誤りを親が訂正する研究に影響を受け、またその訂正が母語習得や第二言語習得に有効であるか否かが調べた歴史がある。第2に多岐に渡る言語習得研究方法について、ショードロンによる研究手法の分類やロングの分類、さらに特定の手法を用いた研究例を紹介している。最後に過去の研究では「妥当性」と「信頼性」がどのように扱われてきたかを述べ、本論文の研究モデルの参考にした。

第三章 研究方法：第二言語・外国語習得を観察した先行研究は多いが、その研究結果は必ずしも一致していない。その原因は、研究対象クラスがコミュニケーション重視なのか文法重視なのか、また学習者の習熟度が高いのか低いのかによって結果が左右されることが考えられる。本研究では、次のリサーチ・クエスチョンを調べた。1) 教師による訂正の方法に多様性があるか、2) 教師2名の訂正方法に異なる傾向があるか、3) 教師は学習者のいかなる種類の誤答に注意が引かれるか、4) 訂正に対する学習者の反応や自己修正の頻度は、学習者の習熟度によって異なるか、5) 日本人学習者にも訂正は言語習得に有効であるか。これらを調べるためのリサーチ・モデルを提案し、被験者と調査手順を記した。

第四章 結果：第1のリサーチ・クエスチョンは、教師Aによる訂正に多様性が見られるかどうかであった。そのために、普通クラスと進学クラスを担当する教師Aを観察し、教師がレベルの異なるクラスでどのように訂正を使い分けるかを調査した。初めに、訂正の頻度に関して、普通クラスにおいて進学クラスの約3倍もの訂正があったので、訂正の頻度にお

いて、その教師の多様性は見られたと言える。しかし、2クラス間において訂正の種類（リキャスト・明示的訂正やプロンプト）において頻度差が見られなかった。リキャストとは、インプットを与えるタイプの訂正で、プロンプトはアウトプットを引き出すタイプの訂正である。したがって、訂正の種類において教師の多様性はみられなかった。この結果から誤答訂正に関しては、能力レベルの異なる学習者を対象としても教師Aは、訂正を使い分けしていないことが伺える。

第2の研究・クエスチョンは、教師2名の訂正の傾向がどうかである。同じレベルのクラスを担当した教師Aと教師Bを観察した。初めに両教師の訂正頻度に有意差が認められ、また教師2名の間で、アウトプットを引き出すタイプの訂正において有意差が見られたが、インプットを与えるタイプの訂正の使用傾向には差がみられなかった。

第3の研究・クエスチョンは、学習者が犯すどの誤り（文法、語彙選択、音韻、母語の使用）が最も教師に訂正を受けやすいかである。同じレベルのクラスを担当する教師Aと教師Bを観察し、誤り項目に順位をつけ、教師2名間の相関関係を調べた結果、相関関係は低いという結果になった。すなわち教師がどの誤りに注目するかは教師によって異なるということである。

第4の研究・クエスチョン、すなわち学習者の習熟度によって、訂正に対する反応（アップテイク）と自己修正（リペア）の頻度に差があるかどうか、第5の研究・クエスチョンでは、すなわち訂正の短期的有効性がみられるかどうかを調べたが、第4と第5の結果は、普通クラスと進学クラスにおいて、学習者は同様に反応と自己修正を示し、両クラスにおいて有意差は見られなかったため、両クラスに同様に有効であったと結論づけた。

第五章 考察と結論：「教師間の要因」、「教師Aの要因」（教師Aがレベルの異なるクラスにおいて、異なる訂正をしたかどうか）、「学習者要因」が誤答訂正にどの程度作用するか考察した。

初めに「教師間の要因」、すなわち両教師の間に訂正の頻度において、さらに訂正の種類の一例プロンプトにおいて差が見られた。これらの個人差は、どの教師を被験者にするかで研究結果に違いがでてくる可能性を示唆している。しかしながら、教師間のリキャストにおいては有意差が見られなかった原因は、極めて似た環境で英語を担当した教師2名を対象としたことが挙げられる。

次に「教師Aの要因」について考察した。過去の第二言語習得研究では母語話者教師は学習者の能力によって言語の使用を変えるという報告が多い。この知見から教師Aもレベルの異なるクラス間において訂正の使用を変えることが予想できた。しかし本研究では教師Aはレベルの異なるクラス間において、訂正の頻度を変えたものの、その訂正の種類、すなわちリキャストやプロンプトにおいては調整することはなかった。つまり、教師Aは学習者の習熟度によって訂正方法を変えていないということになる。このことから、訂正に関してはこの教師はクラス別に使い分けることが困難だったのではないかと解釈した。

最後に「学習者要因」に関して、すなわち学習者の習熟度と訂正の有効性の効果（「アップテイク」と「リペア」）について考察した。学習者によるこれらの反応の差は、予測より少ない結果であった。先行研究では、学習者の習熟度と教師による訂正の有効性には関係があると分析しているが、本研究では進学クラスと普通クラスを比較した結果、訂正の有効性に差は見られなかった。別の解釈をすると進学クラスと普通クラスとも教師による訂正が同等に有効であったとも言える。この結果を次のように解釈した。教師による訂正の

有効性は、学習者の習熟度より、むしろ授業のコンテキスト（第2言語学習環境と外国語学習環境）や学習項目に依存するのではないか。授業形態や学習項目のみならず、学習者の年齢、使用教科書、授業の進行度に渡って同等な二つのクラスを観察したことが、このような結果に至ったと考えられる。最後に、本研究のリミテーションをあげると、本研究は教師による訂正の短期的な効果を測ったもので、長期的な効果については推測できない。教師による訂正の長期的効果を調べる研究が将来実施されることが待たれる。

【論文審査の結果の要旨】

本論文の優れている点は以下の通りである。

第一点として、過去に発表された誤答訂正に関する膨大な論文を英文で読み込み、理解を深めたことは、外国語として英語を学習した研究者にとっては、大きな功績と評価される。

第二に、その結果として、本研究で次の点を解明しようとした着眼点のすばらしさを高く評価できる。1) 同じ教師が言語能力の異なるクラスで誤答訂正の頻度や種類を変えるか、2) 二人の英語母語教師が、同じ言語能力のクラスを教える際において訂正方法に違いがみられるか、3) 二人の英語母語話者は、異なる種類の誤答（文法、語彙選択、音韻、日本語へのスイッチ）に対して訂正頻度の順序に違いがあるか、4) 教師の訂正に対する学習者の反応（アップテイク）や自己修正（リペア）は、学習者の言語能力に関係あるか、5) これらの誤答訂正は日本人学習者にも有効であるかどうか。

第三点として、リキャスト、プロンプト、アップテイク、リペアなどの分類に、二名の判定員が関わり、その判定の信頼性が高めた点は、通常の手続きとは言え評価できる。

第四点として、過去の研究結果と比較し、類似点や相違点を深く考察している点が高く評価できる。特に、異なる結果について、その原因を単一の変数（学習者の熟達度）と解釈しないで、学習者を囲む複雑な環境を総合的に考慮し、授業形態や学習項目にも目を向けて考察している点を挙げることができる。

第五点として、本論文の構成は伝統的な科学的論文の形式をとり、さらに英語自体の推敲を何度も繰り返し、最終的にかなり立派な表現となっている点を評価したい。

本論文のリミテーションとして次の点が挙げられる。

高校入学試験の結果から「進学クラス」と「普通クラス」に分けられているクラスを研究対象とした。すなわち、これらのクラスの学習者の違いを、言語能力、言語熟達度の違いと捉えざるを得なかった現実が、研究結果にある程度影響を与えた可能性があるかもしれない点。次に、本研究で、さらに多くの英語母語話者の被験者が、ランダムに選出され、適切な統計処理を行えば、その結果を母集団に一般化でき、さらに優れた研究と評価される可能性があった。しかし、今回はある高等学校でオーラルコミュニケーションを担当している二名の母語話者だけを被験者としたので、その高校でのケース研究として解釈され、その結果はそれらの教師だけに限定される点が、本研究のリミテーションと指摘されうる。

結論：以上の要旨内容と論文評価をもって、審査員五名は博士論文としての水準をクリアしていると結論づけた。